

研究ノート

## ガーデン ― 現代美術をとおしてみる後楽園 ―

池 田 晶 一

日本福祉大学 情報社会科学部

### GARDEN Korakuen to see through the modern fine arts

Shoichi Ikeda

Faculty of Social and Information Sciences, Nihon Fukushi University

**Keywords:** 現代美術, セラミック, 陶芸

#### 1. はじめに

2000年11月3日～12月3日、岡山市後楽園において「ガーデン ― 現代美術をとおしてみる後楽園 ―」が開催された。この展覧会は、後楽園の庭園内（屋外）に現代美術作品を持ち込むといった、これまでにない試みであった。展覧会の名称が指すように、現代美術という新しいものと、後楽園という300年の歴史を持つ日本庭園の景観との響き合いが展覧会のテーマである。そして、この展覧会に招待を頂き、出品する機会を頂いた。

展覧会に関しての経緯と、作品制作、展示に関することをここにまとめておきたい。

#### ◎データ

会期：2000年11月3日～12月3日

会場：後楽園園内

主催：おかやま後楽園300年祭実行委員会

共催：岡山県立美術館

#### 2. 経緯

まず、この展覧会に関して1999年の年末に担当者から、出品の依頼があった。

岡山の後楽園で現代美術の展覧会を開くということである。展示に関しては、後楽園内に可能な限り自由に…ということであった。

まず展覧会に先立ち、作品の提案（展示計画）を行

う必要があった。

年が明けて、2000年1月に現地に赴き、後楽園内を歩きながら、何をどの様に持ち込み表現するか…考えては見た。しかし後楽園という場所の性格上なかなかの難題であった。まず、非常に広大な敷地、そして完成された景観。この中に果たしてどのような作品を提示できるのか？

会場になる園内は、整然と日本古来の庭園の体をなしており、何とも趣のある場所である。庭園内は、芝があり林があり池があり小川がある。

また、広い空を眺めることが出来る芝の広場や裏山にふっと入ったような坂道。緑があり風があり光がある。それが既に完璧なまでに景観をつくりあげている。

観れば観るほど難しさを感じていた。時間をかけてプランをした結果、光を受け止める装置を作品として創り出すことを考えた。

後楽園の敷地内には、芝から観る広い空、松林から観る木漏れ日、そして林の中からはっと現れる茶室の中の薄暗さの中の僅かな光、池や小川が抱える水の光。後楽園の池がもたらす鏡の機能、この様々な光の変化を受け止める器を作品として提案することとした。

#### 3. 作品制作

作品のプランニングやすりあわせの細かな点につい

ては省略するが、作品は9枚が1セットで約1m四方の陶のパネルを用いて制作することとした。

2000年2月に細かなレリーフを施した作品を制作したが、その表情を基にホワイトとブルーの2色の陶板を制作した。後楽園の鏡としての池が映し出すであろう白い雲と青い空をイメージしてこの2色を考えた。また、技術的な面においてブルーの陶板に関しては、ブルーとピンクの2色の釉薬を角度を変えて施釉し、その陶板の見る角度によって色が変化するように工夫を凝らした。(図1参照)

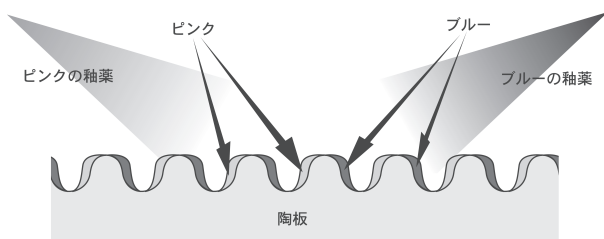


図1

図の様に角度を変え釉薬を施す。

その後、アルミナを塗布して表面にざらっとした質感を与えることによって、微妙な色の変化と、光を含んだような発光体のような表面ができる。

発光体のような…というのは、そのものが発光しているように見えるということで、実際に光を放っているわけではない。細かな表面の処理により、僅かな光でも陶板の表面で乱反射を起こし、そのような効果をもたらすのである。

そして、このように出来た陶板は、床面においてその周りを歩くと、ブルーからピンクへ微妙な色調の変化を見せ、一見トリックアートのような効果をもたらす。

ホワイトの陶板は全体に白い釉薬を施し、その上にアルミナを塗布する。同様に発光しているような効果を得ることが出来る。

こうして、ホワイトとブルーを基調とした2種類の陶板が仕上がった。おのおの寸法は約30cmで、3枚×3枚の9枚で約1m四方の正方形のパネルに仕立てた。

一部は、1枚ずつで、小さな正方形をつかさどるように考えた。

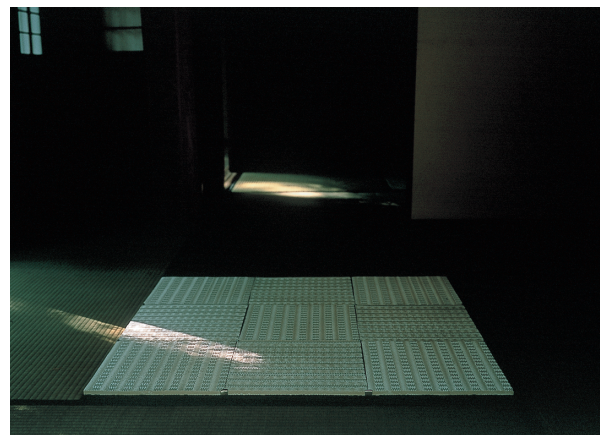
#### 4. 展示

作品が仕上がり、いよいよ作品の展示を行う段になったが、ここからが、実際の意味での正念場である。後楽園内には、あらかじめ作品を設置する場所を幾つか候補としてあげていた。作品のスケールと会場になる後楽園のスケールを考えると、頭の中で考えていただけのプランでは、確信できない点がいくつかあった。陶板の大きさは1m四方のパネルである。例えば、その大きさのパネルを芝生の広い空間に設置してみてもバランスのとれないことは、おおよそ見当がつく。

実際に現場に運んでそれがどの様に見えるのか検討しながら、場所を決めていった。

最終的に設置した場所は、茂松庵(茶室)・観騎亭手前松林・流点付近とした。

茂松庵(茶室)では、茶室の中に「雲の鏡」、苔生した庭に「空の鏡」を配置した。ここでは、雑木林の中の木漏れ日や僅かな部屋に差し込む光を捉えた。葉のすれる音、風の流れる気配、そして刻々と移り変わる光のニュアンスを閑かに捉えることが出来た。



茂松庵 茶室

0



茂松庵 庭

0



また、ここでは特筆事項として、藤本由紀夫氏とのコラボレーションがあったことも記しておかなければならない。藤本氏の作品は形が無く、音の作品として提示された。茂松庵の建物の目のつかない場所に電子キーボードを7台持ち込んで、異なる和音をその中で奏でた。ただ、その電子キーボードからは、一定の和音が延々と流れるだけである。観覧者は、建物のあらゆる場所で、ニュアンスの違う和音の音色に包まれることとなる。

この音に包まれた場の中であって光を受ける装置は人間の五感を鋭くさせるという意味において、面白い効果を得たように思う。



観騎亭手前松林

S

観騎亭手前松林には、「空の鏡」を配置した。ここでは、松林を回遊する人が枯れた松葉の上に作品を発見する。そこには、時として揺れる光が存在し、また枯れ葉が舞い降りてくる僅かな変化を目の前にすることとなる。そしてふと上を見上げると松葉の間から落ちてくる木漏れ日に閑かな時間を発見することになる。

流点付近では、「雲の鏡」を小川の水の中に浮き雲のように配した。ここでは、太陽の光は強烈に直接作品を照らす。白い表面はハレーションを起こし、眩いばかりに白さを放っていた。そして作品のすぐ側には、さらさらと流れる水があり、その水の表面は、太陽の

光を絶えず動きながら捉えている。川面の流れの中に流れる時間と、一時として同じではない光の形を見ることとなる。



流点付近

O

このように、主に後楽園の3つの場所に作品を設置した。それぞれが特徴ある光を見せることが出来た様に感じる。

## 5. 終わりに

今回の展示では光をテーマに、自然の様々な光のニュアンスを受け止める装置として考えた。作品は作品そのものだけでなく、同時に作品の置かれた環境と呼応しはじめる。草木や風、光や空気の匂い。そして風のながれる、水の流れる、時の流れる音をも含んで、作品は存在する。

ここで作品のタイトルについて述べておく。

青と白の2つの作品は、「空の鏡」～うつろいゆく空のいろ～・「雲の鏡」～うつろいゆく雲のいろ～と称した。この言葉の中には、上記で書いたように作品を取り囲む、本来元々そこにあったものを含んで表現

した言葉である。

作品のみを指しているのではなく、作品の置かれた場を含んで作品のタイトルと受け止めていただきたい。それが、この後楽園という場所に私が作品を添えた意図である。

日常私達が何処かに忘れてしまった非常にデリケートな感覚をこの作品を通して見てもらえたとしたら、また感じ取ってもらえたならば、作者としてうれしい限りである。

今後も、人間が本来知っていたはずのデリケートな感覚を日本人として見つめて、また表現していきたいと思う。

## 6. 謝辞

まずは今回、この展覧会に招待していただき、後楽園という極めて特殊な場所に作品を展示し、貴重な体験を持てたことに感謝をしたい。展覧会の企画者・関係者の方々に御礼申し上げる。

また、作品においては、(株)I N A X実験工房の協力を得て陶板の制作を行った。(株)I N A X実験工房スタッフの方々に…。そして作品の搬入搬出においては、ボランティアスタッフの方々の惜しみない協力があった。心から御礼申し上げたい。

## 7. 作品データ

「空の鏡」～うつろいゆく空のいろ～

「雲の鏡」～うつろいゆく雲のいろ～

\* 各々インスタレーション

### ◎設置場所

茂松庵	空の鏡・雲の鏡
観騎亭手前松林	空の鏡
流点付近	雲の鏡

### ◎ 作品撮影

小野 博	…	O
池田晶一	…	S